

高句麗、新羅、百済の古代三国における『尸』の音価とその言語的相違

板橋, 義三
九州大学言語文化部アジアアフリカ言語文化部門

<https://doi.org/10.15017/6796331>

出版情報：言語科学. 31, pp.15-38, 1996-02-26. 九州大学言語文化部言語研究会
バージョン：
権利関係：



「高句麗、新羅、百濟の古代三国における『尸』の音価とその言語的相違」

板橋義三

キーワード: 三国史記地理志、郷歌、古代韓国語、「尸」の音価

80 序

『尸』(中期中国語MC /ʃi/)という漢字は、1145年に高麗の金富軾らによって書かれた、新羅、高句麗、百濟の三国の地名を記している『三国史記地理志』や13世紀後半高麗僧一然によって書かれた三国の仏教関係の記事を中心とする『三国遺事』の中にある14首の『郷歌』、そして1075年赫連挺が著した僧均如の伝記『均如伝』の中にある11首の『郷歌』などに表れている。これは上述のように中期中国語の音素は/ʃi/であるが、古代韓国語にはこれまで一般に言語学者の間で受け入れられている音素は/l/または/r/であった。この前者の読み(/ʃi/)は特に歴史家たちに受け入れられていたが、次第に後者の言語学者の見解が圧倒し理論的裏付けがなくともその読みが受け入れられるようになった。そして、それが伝統的に今日でも受け入れられている。

しかし、実際にはこの漢字音の読みはそれほど明白な訳ではなく、最近では兪と橋本(1973)、Miller(1979)、Sasse(1982)がこの用法を部分的に分析し、伝統的な見解に挑戦し、新しい見解を模索している。事実、古代韓国語のこの漢字の読みはその三国や語法によって異なっていたと考えられる。

拙稿では「尸」の音価における伝統的な見解も含め三国間の「尸」の音価とその言語的相違を究明したい。

81 本論

[1] 中期中国語から見た『尸』の音韻的解釈

この漢字音『尸』は中期中国語(切韻)では/ʃi/「屍」であり、古代韓国語に現れたような/r/または/l/を表す音価は全く持たないと考えられていた(カールグレン B. Karlgren 1957:149)。古代韓国語に借用されたこの漢字音『尸』は前者の場合は音読みであるが、後者の場合は特殊な音読みであったのかまたは訓読みであったのか60年代には全く分からなかった。

しかし、その後70年代から80年代にかけて、兪と橋本(1973:13-5)、橋本(1981:291-3)が中国語比較言語学の立場から次のことを述べている。それは中国語の/l-/が建陽、建甌、邵武、永安などの北方門方言では/s-/に対応し、その他の門語方言では/l-/に対応することが発見されたということである。この対応が明らかにされてはじめて新羅では中国語の本来の漢字音/s-/でもって新羅語の/l-/のような音を転写しようとしたり、ベトナム語で本来/l-/となるべき語が/s-/として現れていたりするという事象が理解される。しかし、中国語のこの/s-/と/l-/の分岐の本来の原因には第三の言語(複数)の介入の可能性を考えるべきであるという。この考え方には一理あるが、必ずしも第三の言語の介入を考えなくても中国語内部の変化によるものとも考え得る。

その分裂に寄与したのは内的要因であるにせよ外的要因であるにせよ、中期中国語ではすでに/s-/と/l-/に分裂しており、この祖語のこれらの音素に対応する音素の復元は非常

に困難であろう。また外的要因である場合、その祖語はどの史的段階を取るかによって異なってくるが、次の可能性が考えられる：(1)中国語の「尸」の音価が/s/と/l/に分裂以前に、*/s/であったものが古代韓国語の/s, ʃ/を表すために使われ、分裂後に別の中国語方言の漢字「尸」/l/が古代韓国語の/r, l/を写すのに使われた。そのため、その表記は全く同じ漢字でなされたが、その音価の違いを示す表記方法が当時なかったために、統一新羅の時代には新羅語の圧倒により、本来高句麗語が行われていた地域では方言という形で残存した。しかし、次第にその当時の音価/s/が忘れられた。；(2)この中国語の/s/と/l/とに分裂する以前に『尸』*/l/が古代韓国語の/r/または/l/を写すために借用され、その分裂以後にはある別の中国語方言から『尸』/s/が借用され、/s/を転写した。；(3)この中国語の「尸」の祖語の音価はいずれにせよ、分裂後に中央の言語の音価/l/が古代韓国語に借用され、またその借用前後に他の中国語方言の音価/s/が借用されたとも考えられる。このいずれにしても、管見ではこれまで考えられてきた、梁柱東(1957:93-7)に代表されるように/r/と/l/が古代韓国語内部において略字化することによって「尸」が/r/または/l/の音価をもつようになったのではなく、古代韓国語の/s/も/r, l/も中期中国語の音価借用であるという事実を基盤にしている。

[2] 古代韓国語から見た『尸』の音韻的解釈

橋本の研究以前は梁柱東(1957:95-6)に代表されるように、古代韓国語の漢字音『尸』によって表される音価/r/または/l/の存在に関しては次の三つの略字説があった。(1)「羅」の略字形、「𪛗」から「𪛖」へ略字化され、その変体が「尸」であるとする。(2)「良」の略字形とし、それは「𪛗」が「尸」に略字化されたものである。(3)「盧」の略字形で、それが「𪛗」に変化し、またそれが「尸」へ略字化され、最後には「尸」となった。これらの諸説は古代韓国語内部の要因によるものであるが、実際は上述のように内部要因によるものではなく外部要因、即ち、中期中国語の方言の中に/l/をもつものがあり、その方言が直接的に古代韓国語に借用されたという事実として考えることができる。従って、略字説はどれも古代韓国語の/l/の存在要因を説明することができない。

また、「尸」を/s, ʃ/の歯擦音として解釈している例があるが、これは属格/所有格を表す短形/-s/のみに表れたとする。しかし、橋本の研究以前はこの解釈については合理的な説明が全くなされないまま、ただ単に古代韓国語内での内的要因によってこの漢字音が使われたとみていた。またそれ以後の研究でもまだ充分には使い分けが説明されていない。

[3] アルタイ諸語との親縁関係を基盤にした『尸』に関する先行研究

a) 梁(1957)は「尸」を/r/または/l/というように流音のみに解釈し、/s/に解釈できるのは属格表示の時だけであるとした。属格以外の場合、流音としてだけしか解釈できない理由は上述のようにこの漢字音が古代韓国語内部の要因によって変化したとしか捉えていないからであり、これはこれまでの比較言語学の「音変化」の解釈の基盤になっているのと全く同じである。というより多分これは実際には比較言語学の解釈基盤をそのまま古代

韓国語の音変化の説明をするために応用したのである。従って、これは上述の如く、この /r/ または /l/ の存在理由が説明できないし、事実、/s/ である語も存在したのでその解釈も不可能になる。

b) 兪、橋本(1973)は中国語と韓国語の両面からこの「尸」の音韻的解釈を巡って論じているが、その中で古代韓国語では「尸」は/s/をもつ語と/l/をもつ語の両方が表れることを述べている。即ち、三国史記の「狼」が「也尸」と記述され/yasi/と読まれ、同様に、「復」は「加尸」/kas/と読まれ、「岬」は「古尸」と記載されており/kos/と読まれている。また「野」は「也尸」/yas/と読めるのではないかとその可能性を述べている。しかし、郷歌に表れる「尸」の中には属格の/s/と解釈できるものが数多く混入しているが、その語には言及がない。また、「尸」は基本的には/r/または/l/と解釈すべきであるとしている。しかし、事実いくつかの語は/s/と解釈できるものがあるが、それらの語でさえも/r/または/l/と解釈している。

c) Miller(1979)は上述の先人の成果を踏まえずにアルタイ語との比較を中心に三国における「尸」の用法の違いを挙げ、兪、橋本(1973)ではその用法が/r/または/l/であるとする語例でもMillerは/ʃ/であるとしその語例を数多く挙げている。しかし、その中には全く推測の域を脱しないものが非常に多い。また、その用法を基にして三国の「尸」の音価を一般化し、それぞれの三国の関係を論じている。即ち、高句麗ではすべて/ʃ/か/ʒ/として表れ、百済では/r/か/l/として表れ、そして新羅では高句麗と同様/ʃ/か/ʒ/として表れたとする。そのため、統一新羅の言語であるMKは新羅語ではなく百済語であり、それは/r/または/l/としてすべてが表れていることから理解できるとしている。しかし、現に統一新羅では新羅語が韓半島全体を支配したのであるから、その当時の使用言語が百済語であったとは考えにくいし、歴史的事実にもそぐわない。さらにその推測をも基盤にしてアルタイ語との比較を行っているので、説得力は弱い。

d) Sasse(1982)はMillerの論議(1979)を概略し、それを基にその信憑性をまず問い、確実に「尸」の読みが/-ʃ/であると考えられるものを他の視点から例証し支持している。またSasse自身も述べているように、その例は非常に限られており、『郷歌』の例は全く挙げておらず、また『三国史記』の「尸」をすべて扱っている訳ではない。アルタイ諸語との比較も行っているが、主にトルコ諸語との比較語例を提示している。しかし、三国間の言語的關係についてはこれらの言語的基盤だけではまだその関係を論証できないことからであろうと思われるが、その言及がない。

[4] 『三国史記』に表れた「尸」の形態

この形態は次の種類だけである。

1) 『尸』は本来その国の言語音で記された地名の音の一部を表すのに使われている。

(a) その音に対応する意味を表す漢字による地名が付されている。

例: 岬城郡—百済の古尸伊県(巻36)

古尸/kos/は岬「みさき」を意味する

(b)その音に対応する音を表す漢字による地名が付されているものがあり、そのほとんどが地名の一部を表す属格接辞として機能している。

特にここで注意すべきことはこの漢字音は語頭には来ず、語中に現れることである。この漢字音の直後に来る漢字によって分類すると次のようになる。

- 1) -尸兮-: 阿尸兮、加尸兮
- 2) -尸伊-: 豆尸伊、古尸伊、武尸伊、富尸伊、号尸伊
- 3) -尸良-: 阿尸良、沙尸良
- 4) -尸X-: 干尸郡、馬尸山、大尸山、他尸買、波尸忽など他多数

古代韓国語といわれる三国時代に行われた三言語、高句麗語、新羅語、百濟語に見られる漢字音『尸』を分析し、その音価を探ってみたい。

(1)高句麗語

- a) 狂 : 也尸 * yasi 「狐」

狂川郡。一云、也尸買。 (三国史記: 卷37)

也 GSR 4g:ia:/ye 尸 GSR 561a:ji/ʃi 狂 GSR 812t:tsiāng/tsing

MK yəzɨ 「狐」

NK yəɨ 「狐」

この語はr/l言語説を説く学者でもこのʃ/ɹ言語説を認め、* yasiを本来の形態であると見ている。その背景には伝統的に史学者も国語学者もこの語をyasiと認めてきたということとMKの対応語がyəzɨであり問題となる音は流音ではないことがあると考えられる。事実、統一新羅語のMKでは上述の通り/z/であり流音ではなく、その点からも決定的に* yasiと復元する最大の理由である。従って、「尸」は/s, ʃ/を表したものとする。

- b) 文 : 斤尸 * kūs 「文、書く」

文倪縣。一云、斤尸波兮。 (三国史記: 卷37)

斤 GSR 443a:kiən/kin 文 GSR 475a:miuən/wen

MK kūl 「文字、文」

MK kkūl- 「引く、引きずる」 <*skūl- <*s + *kūl-

MK kūs- 「(線を)引く、(マッチなどを)擦る、(漢字を)書く」

MK kkūs- 「(側や近くへ)引く、引き寄せる」 <*skūs- <*s + *kūs-

OTK qaz- 「擦る、掘る」

Yak xas- 「掘る」

Kaz qaz- 「掘る」

Kir kaz- 「掘る」

Tat kaz- 「掘る」

Mo qar-u- 「削る、引っ掻く、掘る」

Urd xaru- 「引っ掻く、滑らかにする」

Khk xarax-「削る、引っ搔く」

Ma karka-「竹、木などで搔く」

OJ kak-「搔く、書く、(線を)引く」

この復元形は基本的にMKのkūs-の形態から導き出されるものであるが、それと同時にMKには歯擦音をもつkkūs-とそれと対をなすkkül-が見えるが、これらはそれぞれ*kūs-と*kül-からの派生であろう(cf. 李 1975:143-4)。このことはkūs-に対する流音をもつ*kül-という疑似同義語とでも呼べる語が本来存在していたことを暗示している。この二つの語(ダブルレット)の起源として次の3つが考えられる。

(1)külはkūs-からの内部派生(内的要因)

意味から考えてkūs-の方が本来の意味であり、külはその派生した意味であると考えられる。それは「文字、文」といったkülの意味はkūs-の「引く、擦る、書く」という動作を表す意味に由来すると考えてよいからである。もしこのkülが本来の語kūs-から派生したとすれば、語末の流音に変化した内的原因は何なのかを明確にしなければならない。ここで思い浮かぶのは古代英語のbe動詞のr/sの変換(例えば, is/are, was/wereの変換: rhotacism)であるが、このMK以前の語末の/-l/の音価は[l]であったのか[r]であったのかはまだ不明な点が多いのでこのrhotacismも当然考えられる。ただし、ここで注意すべき点はこの派生が起こったものとすれば、その分裂時期はMK以前であることは確実であるということである。

(2)külは百済語からの借用(外的要因)

この語は百済語でもkül「文字、文」の形態のみであったであろうと考えられる(下記の百済語の項参照)ので、新羅語のそれと同じ形態と意味をもつものの借用は機能的に蛇足となるので、この説はあまり信憑性がないことになる。また、MK kūs-が統一新羅語に存在している理由は百済語の借用からでは説明がつかなくなる。

(3)külは本来新羅語に存在した形態素であり、統一新羅後に新羅語によって征服された高句麗語の基層化または借用(外的要因)

高句麗語の「尸」の音価は一般に/s/で新羅語の/r, l/に対応する傾向があると見てよいので、この説も信憑性が高い。それは意味として新羅語では「文字、文」にすでに変化したため、本来の意味である「引く、擦る」を特別に表す語が別に必要になり、高句麗語のkūs-は本来の意味を保持していたため、これを基層または借用という形で吸収したのではないかと考えられる。これはちょうど現代英語に見られる /ʃ/ と /sk/, /y/ と /g/, /ɟ/ と /k/ (例えば, shirt と skirt, Yates と Gates, church と kirk など) などのいわゆる、ダブルレットの共存である。このそれぞれの後者の形態はすべてスカンジナビアの古代北欧語(ON)からの借用で、意味上もそれぞれの対応する語が分離分担している(Itabashi: 1981)。アルタイ諸語には上記のように反射形が見られるものがあり、特にチュルク諸語における歯擦音が伴って現れる点も考慮すると(このことは古代韓国語がアルタイ諸語と親縁関係にあるということを必ずしも意味せず、広範な借用も可能と考えられる)、この語は本来歯擦音を有し

ていたのではないかと考えられる。

- c) 桃 : 波尸 * pyəs 「稲、粃」
 桃城、本波尸忽。(三国史記：巻37)
 波 GSR 25: puā/po 桃 GSR 1145u: d'au/t'ao
 EMK pyəs 「稲、粃」
 LMK pyə 「稲、粃」
 NK pyə 「稲、粃」

この三国史記の文から「忽」とは「城」の意味であることは疑い得ない。この文中の「桃」という語はEMKの初期統一新羅語でも/s/が存在しており後期にはそれが脱落し、その形態が異なっている。このことからわかるように、この語には本来/s/が語末に存在していたと見てよいと思われる。また中期中国語の形態も考慮し、その復元形は初期の中期韓国語とほぼ同じ形態をしていたのではないかと考える。

- d) 蒜 : 買尸 * mai 「蒜」
 蒜山県、本高句麗買尸達県。(三国史記：巻35、巻37)
 買 GSR 1240: mai:/mai 蒜 GSR 175b: suān-/suan
 MK manal 「蒜」
 NK manŭl 「蒜」

この文中の「達」は「山」の意味であることには異論がないであろう。従って、音声意味レベルでの対応であり、「蒜」(意味)は「買尸」(音価)を有していたと考えられる。問題となっている語はMKやNKでは語中には歯茎鼻音/n/が現れているが、これは下記のように復元した語には全く存在しなかったと考えられるが、その点においてはいまのところ不明である。MKやNKの語末は流音を伴っており、これらの内的形態から判断すると復元形には流音を有することになり、また、その復元形は中期中国語の音価により/mā-/と推定して差し支えないであろうからMKやNKの語中の鼻音を考慮できないという問題はあるものの、復元形全体としては上述のような形態となると考えられる。

- e) 野 : 也尸 * yaŋ 「生の」
 野城郡、本高句麗也尸忽郡。(三国史記：巻35、巻37)
 也 GSR 4g: ia:/ye 野 GSR 83L: ia:/ye
 MK nal 「生の」
 NK nal 「生の、未加工の」
 PA *ñal 「生」
 OTK yaŋ 「新鮮、緑」

WMo	<u>nilaʔun</u>	「生」
WMo	<u>nil-qa</u>	「若い、新緑の、新鮮な」
Khk	<u>ñalun</u>	「生の、新鮮な」
Klm	<u>nilun</u>	「生の、新鮮な」
Na	<u>nealun/ɲalun</u>	「新鮮な、未熟な」
Sol	<u>nama-gdi</u>	「暖/温かい、生暖かい」
OJ	<u>nama</u>	「生」

この場合「城」は意味的に「忽」に相当すると考えてよいから、「野」と「也」は同音異義語であると共に「野」は「也尸」の意味も表していると考えられることから(即ち、「野」=「生」)、これらの二つの語は音声・意味レベルで使用されたと考えられる。即ち、「野」(「生」)は「也尸」という意味をもち、上述の例の前提より復元形には歯擦音を伴っていたと考えられる。また、その判断は外的形態であるOTKの形態素と「新鮮、緑」という非常に近い意味を有していることにより、さらなる強化をしてくれる。つまり、「尸」の音声は/-s/であり、その機能は語末音を表していると考えられる。

f) 有鄰: 于尸 * ul 「内」

有鄰郡、本高句麗于尸郡。(三国史記: 卷35、卷37)

于 GSR 97: jiu/ɣu 有 GSR 995o: jiəu:/ɣu 鄰 GSR 387i: lien/lin

MK	<u>ulh</u>	「族」
MK	<u>ulh</u>	「柵、囲い」
MK	<u>uri</u>	「家畜用囲い、おり」
MK	<u>uri</u>	「私たち」
OTK	<u>uruʔ/uriʔ</u>	「種、親族」
OTK	<u>uri</u>	「(近い)子孫、男の子孫、息子」
MTK	<u>uruʔ</u>	「種、親族」
Bur	<u>urag</u>	「親類、関係」
Khk	<u>ur</u>	「果実、種子、子供」
Oir	<u>ur</u>	「水膨れ、膨れ、いが」
Ma	<u>uri</u>	「貯蔵用の草のはえた凹地」
Ma	<u>uriha</u>	「樹皮の柔らかい皮、卵の殻」
Evk	<u>ur(i)</u>	「胃、腹」
Lam	<u>ur(i)</u>	「胃、腹」
OJ	<u>uti</u>	「家、内」
OJ	<u>udi</u>	「氏、家系」

上述のように「于」は音声的に「有」と類似しているため、この二つの漢字音は同じ音質を

表したと考えて間違いない。また後者の直後の漢字音「鄰」は古代韓国語では/r/または/l/を表したと考えてよい。またアルタイ諸語においてもこの漢字音の/n/は/l/を写すのに用いられていたことも考慮すると、この場合は双方ともに流音を伴った音声レベルでの対応と考えられるから、「尸」は/l/と音読みした蓋然性が非常に高い。さらに後に見るように基本的に流音を表す「尸」をもつ新羅語のMKにおける対応語には/s/は現れず流音として現れている点からも、復元形は* ulであると思われる。また、北方のツングース諸語やモンゴル諸語やチュルク諸語の対応形を考慮すると、この復元形がほとんど完璧にこれらと同じ形態を保持しその意味も共通の意味領域内にあることに気づくが、これは偶然の一致ではないと思われる。即ち、その広範囲の分布から考えて、この復元形でさえも非常に早期にこれらの諸語、特に最も近隣のツングース諸語から借用された蓋然性もあるとともにこれらの諸語の同源語の蓋然性もある。しかしこの時点でそのどちらの蓋然性がより高いかを判断することは至難である。

g) 心: 居尸 * kus 「胸、乳房」

心岳城、本居尸埤。(三国史記: 卷37)

居 GSR 49c': kiwo/kü 心 GSR 663a: siəm/sin

MK k'ül 「憐義」(『訓蒙字会』:1527)

TK köküz 「胸、乳房」

Mo kökün 「胸、乳房」

Chuv kaGər 「胸、乳房」

OJ kököri 「心」

ここでは「岳」は「埤」を指すことが分かっているので、「居尸」は「心」の音価を表し、逆に「心」は「居尸」の意味を表していると考えられる。MKの形態を考え合わせると「居尸」の「尸」は歯擦音ではなく流音であった蓋然性が大きい。しかし、この場合、f)と異なり「尸」に対応する漢字音がないため、「尸」の音価は歯擦音であった可能性も十分存在する。ここでのその判断は後に見るように「尸」の音価が流音である新羅語のMKの形態のみを考慮すれば、kulまたは* kurと復元できる。

h) 朽: 骨尸 * ku-s

朽岳城、本骨尸埤。(三国史記: 卷37)

骨 GSR 486a: kuət/ku 朽 GSR 1041: xiəu:/hiu

ここでは「岳」が「埤」に対応することがすでに分かっているので、下線の語、「朽」が「骨」に対応することになる。またその対応関係は音価とその意味という関係ではなく、その語同士の音価の類似性である。従って、この「尸」の機能は属格/所有格であり、/-s/を選択することになり、復元形は上述のようになる。

この場合は「岳」は「埤」に意味上の対応をなし、「城」は「忽」に意味的対応をなすことが明らかである。また、上述の語の対応から下線部が対応することは明白であり、「牙」の音価、/nga/, と「皆」のそれ、/kai/, が非常に近いことからこの二つの漢字は意味ではなく音を表すために使われたと思われる。従って、ここでの「尸」は属格を表していると考えられ、上述のように復元できる。

j) 銀：召尸 * ḡour/ḡoul

禾銀城、本召尸忽。(三国史記：卷37)

銀城。本折忽。(三国史記：卷37)

召 GSR 1131e : d' iäu-/ḡao 禾 GSR 8a : ɾua/huo, ho

銀 GSR 416k : ngien/yin 折 GSR 287a : tsiat/che

この二文では「城」は「忽」の意味であると解釈して支障はないので、「銀」は「召」と「折」に音声的にも意味的にも対応していると考えられる。それは「召」も「折」もほぼ同じ音価を示しているが、正確には「折」の語末音には /-t/ が存在しており、これは古代韓国語では一般に /ɾ/ に対応するので「尸」は /ɾ/ または /l/ を立てることができる。「禾」はどれにも対応しない。従って、語全体では /ḡour/ または /ḡoul/ を立てることができる。

Miller(1979:21)はこの語について「銀」の意味を表すのは「召尸」であり、「尸」は属格を表すのではなく、この語の語末の子音を表すとして、これと同じ語源の語であるとする下記のようなチュルコ諸語を挙げている：

OTK kümü 「銀」

Chuv kemel 「銀」

TK gümü 「銀」

しかし、この語中に -m- が存在し、これが脱落した形態をその比較の対象として考えているのかもしれないが、それにしてもその比較は至難と言える。従って、これは現時点で理解されていることから判断すれば、アルタイ諸語には反射形は見当たらないし、流音を語末音とする上述の復元形だけが可能である。

k) 犁：加尸 * kas 「犁」

犁山城、本加尸達忽。(三国史記：卷37)

加 GSR 15a: ka/kia 犁 GSR 519h: lji/li

MK karai 「犁」

MK kal- 「掘る、耕す」

Mo kürä-/qar-u- 「掘る」

OTK qaz- 「擦る、掘る」

Kir kaz- 「掘る」

Tat kaz- 「掘る」

- 0sm qaza- 「ヤスリで削る」
 Ma-Tg kor- 「搔く、削る」
 Ma halgan/halhan 「犁の刃」
 OJ kör-/kur- 「剝り貫く」

ここでは「城」と「山」はそれぞれ「忽」と「達」の意味を表していることには何の異論もないと思うので、「犁」は「加戸」に対応することになる。この対応は音声におけるものではなく「犁」は意味を「加戸」は音声を表していることはそれぞれの音、/lji/と/ka/を比較してみるとわかるが、これはMKの形態から復元できる形態は歯擦音ではなく流音を含むようであるが、g)* kusのケースと全く同じであるから前述の前提がそのまま適用される。また、もう一つの可能性としてはツングース諸語やモンゴル諸語の影響を非常に早い時期に受け、本来kasであったものがkarに取って代わられた可能性もある。従って、どちらにしても高句麗語自体の形態は* kasであったと考えることができるかもしれない。

l) 安: 仇尸 * giu-s

安遠縣、本仇尸波知。(三国史記: 卷37)

仇 GSR 992p: g' iəu/k' iu 安 GSR 146a: an/an 遠 GSR 256f: jiwan/yüan

この文において「安」は「仇尸」に対応しているとみると、その対応の仕方は意味レベルかまたは音声レベルのどちらかであるが、ここで見る限り、そのどちらでもないようである。また、「遠」の漢字音を含めても全く同じであり、ここではもしこれらの漢字音の関係があるとすれば、それは属格の/-s/であろうという可能性のみである。従って、他に支障がない限り、最も妥当と考えられる属格をその音価の機能と考える。

m) 淳: 豆尸 * doufi

淳遲縣、本豆尸。(三国史記: 卷37)

豆 GSR 118a: d' əu-/tou 淳 GSR 464e: ziuen/ʃ' un 遲 GSR 596d: d' i/ʃi

この場合は「淳」は「豆」に音声上対応すると考えられる。それは閉鎖音の/d-/はその口蓋化した破擦音/ʃ-/は音声レベルにおいて大変近いため、この両者はほぼ同じ音価であると見做してよいと考えるからである。従って、この地名は両者共に音声レベルでの対応であると考えられる。即ち、「遅」も/ʃ/が歯擦音化しているものの、「尸」に音声レベルで対応すると見てよいから、「尸」は/ʃi/と読める。従って、上述のようにこの語は流音ではなく、歯擦音を有すると考えられる。

n) 帶: 大尸 * dai-s

帶山縣、本大尸山。(三国史記: 卷37)

大 GSR 317a: d' ai-/ta または t' ai-/t' ai 帯 GSR 315a: tai-/tai

ここでは「山」が「山」に対応しているので、「帯」が「大尸」に音声的に対応していることが分かる。また、「帯」と「大」の音価はほぼ同じなので、その直後の「尸」は属格の/-s/という音価の解釈だけが可能となる。従って、ここでは「尸」は属格であると判定する。

o) 沙: 号尸 * ɣau-s

沙伴州、本号尸伊城。(三国史記: 卷37)

号 GSR 1041p: ɣau-/hao 沙 GSR 16a: sa/ja 伴 GSR 181c: p' uân-/p' an

この文における「伊」と「城」に対応する部分がないが、この部分は他にも同じようにパターンがあることから、これは「一伊城」というひとつの特別なパターンであると考えられることができる。「沙」は「号尸」の意味を表しているのではないことは次のp)の例からもわかるように「号」は「牟」に対応しており、その音価は「沙」とは全く異なることによる。また音声的に近似できるほどに「沙」と「号」の双方の音も近くはない。そのことは「伴」を含めて考えても全く同じである。従って、これらのことを総合して考えると、この「尸」は属格だと考えるのが最も妥当ではないかと思われる。

p) 牟: 号尸 * ɣau-s

牟支縣、本号尸伊村。(三国史記: 卷37)

号 GSR 1041p: ɣau-/hao 牟 GSR 1110a: miau/mou 支 GSR 864a: tsie/chī

この文もo)の例と同様で、「伊」と「村」に対応する部分が県名を表す漢字には存在していないが、これも「一伊村」というパターンの一つであり、それは「一伊城」と基本的には同じパターンである。従って、上記のことを考慮すると、「号尸」も属格を表していると言ってよい。

以上、「三国史記」に現れるすべての高句麗語の例を見て来た。これらの例から言えることは次の3点に集約される。

(a)MKにおいて/s/, /ʃ/, または/ゼロ/と現れる時は高句麗語の「尸」は流音と歯擦音の対応に無関係に/s/または/ʃ/と復元される。

(b)MKに流音/r/, /l/として現れる時はほとんどの場合アルタイ諸語の同語源語または借用語と考えられる語が存在する場合であるが、高句麗語の「尸」は一般に歯擦音であると考えられる。ある特定の音価が他の漢字音によって流音であると分かる場合でも特別に高句麗語の「尸」は一般に流音として復元され得るが、その場合でも他の語彙の音価の一貫性から本来の語は流音ではなく歯擦音であった傾向があ

り、その流音の存在理由としては借用が考えられる。

- (c)MKに対応する語彙がない場合、文中のその語が音声レベルでの対応であるか、または全く音声・意味レベルの対応がないかである。音声レベルでの対応がある時はそのほとんどが属格/-s/と考えられ、対応がない時も「尸」は属格/-s/である蓋然性が高いと考えられる。

(2)新羅語

「三国史記」の34巻に現れる新羅の地名をすべて取り上げるが、その数は非常に少なく4例しかない。

a) 安 : 阿尸: 阿乙 * al

安賢縣、本阿尸兮縣。一云阿乙兮。(三国史記: 卷34)

阿 GSR 1m: a/o 安 GSR 146a: ân/an 賢 GSR 368e: ȳien/hien

乙 GSR 505a: iet/yi

ここでは「安」と「阿尸」と「阿乙」が音声上対応していることが分かるが、特に後者の2つが完璧に対応している。その前提としてはこの2者はそれを含む文ではそれぞれ問題の語の直後にも同じ漢字「兮」が現れていると言うことである。従って、「尸」は「乙」に対応するのは明らかである。さらに古代韓国語時代における対格接尾辞である「乙」の音価は/er/であり、流音を含んでいたことが分かっているので、「尸」は齒擦音ではなく流音であり、「阿尸」は結局/*al/と復元できる。

さらに「安賢縣」の「安」は本来の地名「阿尸兮」や「阿乙兮」の「阿尸」と「阿乙」の音結合より作られたものと考えられ、またアルタイ諸語などでも/l/を表すのに用いられていることなどを考え合わせると、/*an/ではなく/*al/であったと考えられ、上述の結論を強化することになる。

b) 管 : 古尸 * kol 「菅」

管城郡、本古尸山縣。(三国史記: 卷34)

古 GSR 49: kuo:/ku 管 GSR 157h: kuân:/kuan 菅 GSR 157n: kan/kien

MK kol 「い草、菅」

kəl 「葦、い草」

Mo qulusun 「葦」 < * kulusun

MTK kaŋ-ak 「い草、菅」

この場合の対応はまず「城」と「山」であると理解して支障はないので、残りの「管」が「古尸」に対応していると見て間違いはない。またMKの形態とその意味から判断して「管」は「菅」の間違いであろうと思われる。このことは「古尸」は「管」ではなく「菅」であると解釈してい

いことを意味している。新羅語では少なくとも齒擦音を有する「三国史記」に現れる語とは本来高句麗語では齒擦音に当たる同源語でも流音を有していたのではないかということである。さらにa)の漢字音「安」にみたようにこの「菅」または「管」のどちらにしても語末音は/-n/であり、これはアルタイ諸語においては/l/を写すために使われており、このことも参考にとすると、一般に/l/に用いられたと解釈してよい。従って、これが正しいとすると統一以前の新羅語にも「尸」は一貫して流音であったということになる。その裏付けとなるのは下記に見る「郷歌」に現れる「尸」はすべて(属格接尾辞の例を除く)流音であることにある。

- c) 安 : 阿尸:阿那 * al
威安郡。阿尸良国、一云阿那加耶。

これはa)の場合と全く同様であるから、問題の「尸」は/l/と読んで差し支えないと考えるので、それからの復元は上述の通り*/al/となる。

- d) 復 : 加尸 * kar
新復縣、本加尸兮縣 (三国史記: 卷34)
加 GSR 15: ka/kia 復 GSR 1034d: b' iuk/fu
MK kar(i) 「分、岐」
OTK qaʃ 「境界、壁、丘、断崖、まゆげ」
Uig kas 「盛り上がった土地、壁、丘、断崖」
Evk gara 「枝、小枝、棒」
Sol gar(a) 「枝、分派」
Lam gar 「枝、小枝」
gar(a)- 「切る、割る、分割する、分枝する」
Neg gaja 「枝、小枝」
gajalga- 「切る、割る、分枝する」
Ork gara 「枝、小枝」
Nan gara/gari 「枝、小枝、刺」
Ma garga(n) 「枝、小枝、分科、四肢、支脈」

新羅語の「三国史記」の例では「尸」を例外なく流音/r, l/と捉えることが出来るが、それは中期韓国語に見られる同源語に流音のみが見られることと下記にみるように、「郷歌」の例では例外なく「尸」は流音と見ることが出来ることから裏付けられる。それは「尸」が名詞の末尾音/-r/を表しているものや動詞の連体修飾形/-r/を表しているという事実から理解出来る。従って、新羅語のその表記は流音が使われていたと考えられる。本来は/r/または/l/だったはずである。

(3)百済語

百済の地名は三国史記の36巻と37巻にそれぞれ6件ずつ現れるが、実際はそれぞれが重複しており、その出現件数は6件である。下記にその6件の地名を記しその分析を行う。

a) 伊 : 馬尸 * mari 「頭」

伊山郡、本百済馬尸山郡。(三国史記巻36)

馬 GSR 40a: ma:/ma 伊 GSra: i/yi

MK mari/məri 「頭」

NK məri 「頭」

この文では「山」が両方の地名に共通しているので、その直前の漢字音、「伊」と「馬尸」が対応することになる。これは音声・意味レベルにおいて対応している。即ち、「伊」は「頭」の意味であり、その音価は「馬尸」/mari/である。それを裏付けるようにMKに/mari, məri/で流音を伴っている。これは兪&橋本(1973:25)でも兪が同じような考え方をしている。

b) 新 : 沙尸 * sai-s

新良縣、本百済沙尸良郡。(三国史記巻36)

沙 GSR 16a: sa/ʃa

MK sai 「新」

NK sae 「新しい」

ここでも上の例と同様に、両方の地名に同じ「良」がありその直前の漢字音、「新」と「沙」はその意味とその音声をそれぞれ表していると言える。即ち、「沙」/sa/の意味が「新」である。これはMKでは/sa/「新」は名詞としても形容詞としてもそのままの形態で使われたことが分かっているので(この機能はアルタイ諸語の名詞、形容詞と全く同じであり、その点からも同源の可能性もある)、それはOKにもそのままあてはまると考えるからである。従って、「沙尸」は/sai-s/と復元できる。つまり、この語からは「尸」は属格として存在したと考えられる。このMKに対応するアルタイ諸語の同源語または借用語は下記のように存在するが、そのことは直接「尸」とは関係がない。

Mo saja 「たった今」

Bur haja 「新しい」 < * saja

Tk sai 「若い」

c) 大 : 大尸 * dai-s

大山郡、本百済大尸山郡。景德王改名。今泰山群。(三国史記巻36)

大 GSR 317a: d' ai-/ta または t' ai-/t' ai 泰 GSR 316a: t' ai-/t' ai

MK tai 「大」NK tae 「大きい」

この地名からすぐ分かることは両方とも同じ漢字「山」と「大」が使われていることである。また、「泰」は「大」と音声的には全く同じで、これも「大」を/t'ai/という音価であることを示している。従って、この「尸」の意味は属格/-s/だけの機能である。

d) 伊 : 豆尸/富尸 * douli/douri伊城縣、本百濟豆尸伊縣。景德王改名。今富利縣。(三国史記卷36)豆尸伊郡、一云富尸伊。(三国史記卷37)豆 GSR 118a: d'au-/tou 富 GSR 933r: piəu-/fu頭 GSR 118e: d'au-/t'ou 利 GSR 519a: lji-/li

第一文を見てみると、下線の「伊」の音価はa)で見たような/mari/とは考えられない。それはそれに当たる音価は「豆尸」/douli/または/douri/であると考えられるからである。また、「富利」は/furi/と復元し得るが、それは「豆尸」の音価/douli/または/douri/と等価ではないが、「利」は「尸」の音価が流音を伴っていることを再確認させてくれる。それは第二文の「豆尸」は/douli/または/douri/と解釈してよいと考えられるし、「富尸」の「富」と「豆尸」の「豆」の音価とはほとんど同じなので「富尸」は/douli/または/douri/と解釈できる。即ち、この「尸」も/r, l/と解釈できる。従って、「豆尸」も「富尸」も/*douli/または/*douri/と復元できる。これは面白いことに同じ「豆尸」という漢字を使用しても、高句麗語では/douʃi/歯擦音であるのに対し、百濟語では/douli/、/douri/で流音となっている。

e) 岬 : 古尸 * kos岬城郡、本古尸伊縣。(三国史記卷36)古尸伊縣 [長城]。古西伊縣 [長城]。(三国史記卷37)古 GSR 49a: kuo:/ku 西 GSR 594a: siei/siMK kos 「岬、半島、山腹」NK kot, kkoc' i 「岬、半島、山腹」

第一文の中の漢字音「岬」はMKの形態素/kos/を考慮すると、その音価は/kos/であると同時に「岬、半島、山腹」とその漢字音と意味も一致する。従って、この漢字音「岬」は意味を、それに対応する「古尸」は音価を表していると考えられ、その漢字音の音価をそれぞれ結合すると、/kosi/になり、MKの形態素に非常に近い。さらにそれを裏打ちするように「尸」が「西」に対応し、これは音読みで両方とも/si/で一致するので、「尸」は/si/の歯擦音と考えてよい。しかし、これはこれまでの流音をもつ語彙に入らないので、この語は早い時期に高句麗語から借用したものかもしれない。つまり、百濟語と新羅語では本来流音/kor/といっ

た同源語を有していたのが、何らかの理由でこの語だけが恣意的に選択され百済語と新羅語に借用されたという可能性はある。しかし、高句麗語の項で見たように、ここでは本来百済語に* korという反射形はなく、またアルタイ諸語にもその反射形が存在しないことから、この「尸」は単に/s/を表すために使用されたと考えるのが妥当である。

f) 武靈 : 武尸 * mur

武靈郡、本百済武尸伊郡。(三国史記卷36)

武 GSR 104a: miu:/wu 靈 GSR 836i: lieng/ling

ここでは同じ「武」をしようしているので音声レベルでの対応を考えてよい。つまり、「靈」が「尸」に対応するので「尸」は/ri/と読み流音を有していたと考えられる。従って、上記のような復元形が考えられる。

百済語の「尸」は属格の用法を除いてほとんどが/r/であり、その漢字音はその直前の名詞の末尾音を表すために使用され、実際その用法がほとんどである。例のb)とc)では「尸」は属格の/-s/を表していると考えられるが、この用法は後に見るように新羅語の郷歌にも一か所現れるが、百済語の場合三国史記に現れるのはこの二つだけである。従って、百済語の「尸」は本来/r/であったと考えられる。

[6] 郷歌に表れた『尸』の機能

郷歌には32の例文中に「尸」が37回出現する。そのすべてを検討することにするが、まず、「尸」を機能別に大別分類すると次のようになると考えられる。

1) 動詞の未来の連体修飾末尾音

下記のaでもbでもこの場合はアルタイ諸語の動詞未来形接尾辞/-r/との直接的関係があると考えられるが、それは双方の形態素とその機能が直接対応するからである。即ち、動詞の語根そのものの対応はないものでもその接尾辞の対応は常であり、その点においては新羅語とアルタイ諸語との系統関係または借用関係があると言えるかもしれない。

a. 動詞の未来連体修飾末尾音:「__ 尸 + 体言」

この場合には「尸」は/r/のみを表す。高麗時代にはすでに「乙」と「隱」が代わって使われるようになり「尸」は全く顧みられなくなる。このことはとりもなおさず、この用法は統一新羅では少なくとも/r/のみを表したことの裏付けとなる。さらに、この用法が高麗時代には二つに分離したとみることも充分可能であり、事実、兪と橋本(1973:22)はそうに見ている。

b. 動詞の未来連体修飾末尾音:「__ 尸 + 用言」

これは上述のaと同様だが、その直後に用言がくる点が異なる。

2) 名詞の末尾音

a. 単独の名詞末尾音:「__ 尸」

この場合には「尸」は /r, l/ を表す。

目的格を表す名詞の末尾音:「__ 尸 + 動詞」も一般に考えられるが、これは実際には目的格を表しているのではなく a の名詞の末尾音を表していると解釈できるので、a に属するものと考えて良い。従って、この場合には「尸」は /r, l/ を表す。

b. 属格を表す名詞の末尾音:「__ 尸 + 名詞」

この場合には「尸」は /s/ のみを表す

3) 名詞の語中音

a. 単語の語中音:「__ 尸 __」

この場合には「尸」は /r, l/ のみを表す。

次に郷歌の「尸」を有する句を歌の書かれた年代順に見て行くことにするが、ここで扱う歌はすべて三国時代に新羅で書かれたものである〔6世紀後半から8世紀後半にかけてのもの〕。従って、新羅の「尸」の読みを表していると考えてよい。〔 〕内の数字とアルファベットは上述の「尸」の機能の分類番号であり、() 内の番号は梁柱東の「古歌研究」の句の番号である。

1) 舊理 東尸打叱 *sai-s [2. b] (彗星歌 1-1)

nye saismurskaz

昔 東の海辺に

2) 三花矣 岳音見賜烏尸 聞古 * posyaor [1. b] (彗星歌 5-2)

samhwaŋi oramposyaor tŋtko

三人の騎士がこの山を訪れたと聞き..

3) 月置 八切爾 数於将来尸 波衣 * hyaryar [1. a] (彗星歌 6-3)

tartu paciri hyaryar pae

月に 熱狂的に 照らされる 所に

4) 道尸 掃尸 星利 望良古 * kir [2. a] * psur [1. a] (彗星歌 7-1)

kir psur pyar parako

道を 掃く 星を 眺めながら

MK kilh 「道」

Ma girin 「線、列、線条」

Neg giri 「岸、陸地」

Na gir, giri 「断崖、陰岸」
 Evk giri 「砂岸、砂州、礫」
 OJ kisi 「水際、断崖」

- 5) 哭屋尸以 憂音 * uri [3.a] (慕竹旨郎歌 2-2)
uri sirim
 悲しそうに 嘆く
- 6) 目煙 廻於尸七 史伊衣 * torchir [3.a] (慕竹旨郎歌 5-2)
 nun torchir saie
 目が 気づく 間に [=すぐに]
- 7) 慕理尸 心未 行呼尸 道尸 * kurir [1.a] * nyəor [1.a] * kir [2.a] (慕竹旨郎歌 7-2)
kurir mAZAmi nyəor kir
 慕う 心の 行く 道は
- 8) 宿尸 夜音 有吐下是 * car [1.a] (慕竹旨郎歌 8-3)
car pam isiri
 寝る 夜は あるだろうか
- 9) 秋察尸 不冬 爾屋支 墮米 * kAZAr [2.a] (怨歌 2-1)
kAZAr antar iuri time
 秋が 来ないうちに しおれ 落ちて
- 10) 行尸 浪 * nyər [1.a] (怨歌 6-1)
nyər mürskyər
 行く 潮
- 11) 二尸 掌音 毛呼支内良 * tur [2.a] (禱千手観音歌 2-1)
tur sonspatang mohonua
 二つ 手を 合わせて
 MK tulh 「二」
 Ma zuwə 「二」
 Na zuər(ə), zur(u) 「二」
 Ne zul 「二、第二の」
 Och zu 「二」
 Udh zu 「二」

Evk ʒur 「二」
 Sol ʒur 「二」
 Lam ʒθr, d'ur, ʒur 「二、双」

- 12) 祈以支白屋尸 置内呼多 * pisarβor [2.a] (祷千手観音歌 4-1)
pisarβor tunuota
 懇願を する
- 13) 遺知支賜尸等焉 * kithisyar [1.a] (祷千手観音歌 9-3)
kithisyartan
 下さるなら
- 14) 用屋尸 慈悲也 根古 * psur [1.a] (祷千手観音歌 10-2)
psur cabiyə khūnko
 用いる 慈悲の 多くを [=多くの慈悲を下さい]
- 15) 臣隠 愛賜尸 母史也 * tazasyar [1.a] (安民歌 2-1)
sinūn tazasyar əziyə
 臣下は 愛しなさを 母親である
- 16) 民焉 狂尸恨 阿孩古 為賜尸知 * ər [1.a] * hasyarti [1.a] (安民歌 3-1)
minan ərhan ahaiko hasyarti
 民は 馬鹿な 子供達で だろう
- 17) 民 是 愛尸 知古如 * tazar [2.a] (安民歌 4-1)
min i tazar arkota
 民 は 愛を 知るのである
- 18) 於冬是去於丁 為尸知 * harti [1.a] (安民歌 7-3)
ətūikartyə harti
 どこに行くことを するだろうか
- 19) 民隠如 為内尸 等焉 * hanar [1.a] (安民歌 9-4)
mintai hanar tan[条件助詞]
 民のように なせ ば

- 20) 雪是 毛冬乃呼尸 花判也 * motnuor [1.a] (讃耆婆郎歌 10-2)
 sari motnuor hwaphan'ya
 霜を 無視する 花郎よ
- 21) 浮良落尸 葉 如 * ptatir [1.a] (祭亡妹歌 6-3)
 ptatir nip tai
 落ちる 葉のように
- 22) 還於尸 朗也 * tor [1.a] (遇賊歌 6-5)
 tor ryə
 戻れる だろうか
- 23) 好尸 日 * tyohar [1.a] (遇賊歌 8-1)
 tyohar nar
 良い 日
 Mo naran 「太陽」
 Mo naratai/naratu 「晴れた、日中」
- 24) 不冬 喜好尸 置乎理叱過 * kishor [1.a] (隨喜功德歌 8-1)
 antar kishor tuorisko
 喜ばず して あるべきか
- 25) 向屋賜尸 朋 知良門尸也 * aosyar [1.a] * arasyəira [3.a] (請佛佳世歌 6-1)
 aosyar pət arasyəira
 従う 友を 探したよ
- 26) 道尸 迷反群良 * kir [2.a] (請佛佳世歌 8-1)
 kir wonmuriya
 道に 迷える徒よ
- 27) 命乙 施好尸 歳史中置 * sihor [1.a] (常隨佛學歌 6-1)
 myəngür sihor saz Haitu
 命を 捨てる 時さえも
- 28) 然叱皆 好尸 ト下里 * hor [1.a] (常隨佛學歌 7-1)
 kūraskūi hor pohiri
 このように する 学び

- 29) 佛體爲尸 如 * hor [1. b] (恒順衆生歌 8-1)
 put' yəhor tās
 仏がする 如く
- 30) 佛體叱 海等 成留焉 日尸 恨 * nar [2. a] (普皆廻向歌 5-1)
 put' yəs patar iran nar han
 仏の 海を 成せる 日 は
- 31) 生界 盡尸 等隱 * taar [1. a] (総結无盡歌 1-1)
 saingge taar tan[条件助詞]
 生界を なくせ ば
- 32) 吾衣願 盡尸 日 置 * taar [1. a] (総結无盡歌 2-1)
 naiwən taar nar tu
 我願いを なくす 日 も

以上、郷歌に表れる「尸」のすべての用例を見たが、属格を表す/s/の一例を除いてこれらのどれもすべて「尸」は/-r/と判断することができる。即ち、「尸」が直後の体言を修飾するものが23例ある。次に多いのが「尸」が名詞の末尾音を表す例で8例あり、そのうち2例(「愛尸」が二度、「道尸」が三度)が繰り返して出現するので、実際は5例となる。次は名詞の語中音を表す例で、これは3例ある。そして次が「尸」の直後に用言を取るもので2例あり、最も少ないのが名詞の属格を表す例で1例見える。

これはこの/-r/が名詞の末尾を表す音である時は新羅語では/r/であることを意味すると同時にその中にはアルタイ諸語に同語源語または借用語と考えられるものが見つかることもあるのが分かる。また、/-r/が動詞の未来連体形末尾音を表す場合は、それは本来動名詞であったのが名詞を修飾する連体形として機能するようになったものである。これはアルタイ諸語の未来の動名詞語尾/-r/に形態的にも機能的にも一致している。事実、OKの未来動名詞形だけでなく過去、現在を表す動名詞形(それぞれ/-m/, /-n/)もアルタイ諸語のそれと全く形態も機能も一致し、その点からもこの未来を表す動名詞形の信憑性も高いと考える。

S2 結論

上述のように三国時代のそれぞれの国で使われた漢字音「尸」は一般に次のような読みであったと考えられる。

高句麗語 : /s, ʃ/ (属格の/-s/を含む)

新羅語 : /r, l/ (属格の/-s/を含む)

百濟語 : /r, l/ (属格の/-s/を含む)

古代韓国語期においても高句麗語では「尸」は/s, ʃ/という音価であるのに対し、新羅語と百濟語では「尸」は/r, l/であり、一般にこの時期においてはその言語的な違いはないと考えられていたが、事実このような違いがあることが分かった。アルタイ諸語内でもチュルク諸語と同じような通時的な変化を遂げたとも考えられる。それに対して新羅語と百濟語はモンゴル、ツングース諸語系の言語と同様な通時的な変化をしたとも考えられる。三国時代から統一新羅、そして高麗の時代に移行して行く間にs/ʃ系言語である高句麗語はr/l系言語である新羅語にほとんどが交替してしまった為、r/l系言語の特徴しか残らなかったのである。これはr/l系言語である新羅語が台頭していた事実やもう一つのr/l言語である百濟語やアルタイ諸語の反射形または借用のあげてあるものはr/l系言語であるツングース諸語が隣国の高句麗語にも影響を及ぼしたのであろうと理解できる。

引用/参考文献

1. 李基文 1975「韓国語の歴史」大修館書店
2. 李基文 1983「韓国語の形成」成甲書房
3. 小倉進平 1974「郷歌の研究」京都大学出版
4. 金東昭 1981「韓国語 Tungus語の音韻比較研究」暁星女子大学校出版部
5. 金富弼 1975「三国史記 下 雑誌 列伝」林英樹 訳 三一書房
6. 金芳漢 1983「韓国語の系統」三一書房
7. 權在善 1974『新羅語の聲調 研究』韓国語文学大系 I 「新羅時代の言語と文学」蜚雪出版社
8. 橋本萬太郎 1981「現代博言学」大修館書店
9. 村山七郎 1963「高句麗語と朝鮮語との関係に関する考察」朝鮮学報 No. 26
10. 兪昌均 1956「郷歌의 文法的機能과 音價」国語国文学 No. 15
11. 兪昌均、橋本萬太郎、1973「郷歌 表記用字の上古性的 側面」新羅・加耶文化 vol.5
12. 梁柱東 1957「郷歌の研究」博文出版社
13. ----- 1928「三国史記」朝鮮史学会

(欧文)

1. Bernhard Karlgren, 1957 Grammata Serica Recensa The Museum of Far Eastern Antiquities, Bulletin 29, Stockholm.
2. Gisaburo N. Kiyose, 1986 "Tunguz and Other Elements in the Languages of the Three Kingdoms", Korean Linguistics Vol.4
3. Ki-Moon Lee, 1975, "Remarks on the Comparative Study of Korean and Altaic", Proceedings of the International Symposium
4. Yoshizo Itabashi, 1981 "The Coexistence of Germanic /k/, /g/, /sk/, and /ç/, /y/, /š/--Due to Old Norse Influence or Due to Anglican?" mimeograph version
5. Roy Andrew Miller, 1979, "Old Korean and Altaic", Ural-Altaische Jahrbücher 51 pp.1-54
6. G. J. Ramstedt, 1949, 1953, "Studies in Korean Etymology", Memoires de la Societe Finno-ougrienne XCV
7. Werner Sasse, 1982, "尸 as a Phonogram in Early Korean Writing", Linguistics in the Morning Calm Ed. by The Linguistics Society of Korean

要旨

拙稿は三国時代の古代韓国語、即ち、高句麗語、新羅語、百濟語において使用された漢字音『尸』の読みを「三国史記・地理誌」と「郷歌」のすべての例文を取り上げ、その分析を試みたものである。高句麗語では「尸」はほとんどの場合/s, ʃ/と解読ができるのに対し、新羅語と百濟語では「尸」はほとんどの場合/r, l/としか読み解くことができない。これは本来三国間、特に高句麗語と新羅語・百濟語における言語的相違があまりないものと考えられてきたことに対して、新しい見解を与えるものである。またこの音韻上の二分法は現段階では証明は不可能かもしれないが、アルタイ諸語におけるそれと全く同じであることも支持しているように思う。

Title: "The Linguistic Discrepancies among the Three Kingdoms in the Old Korean Period Seen by Examining the Phonological Value of the Character '尸'"

Summary

This paper is an attempt to find out all the readings of the Chinese character '尸' used in the languages of the Three Kingdoms, Koguryo, Paekche, and Silla, by examining the oldest records, the *Samguk sagi* [三国史記] and the *Hyangga* [郷歌]. It is found that Koguryo has predominantly the sibilant reading /s, ʃ/ with a few exceptions of probable loans from Tungus with /r, l/, while Paekche and Silla have the liquid reading /r, l/ except for a few probable Koguryo borrowings with /s/. Some of the nouns ending with '尸' might be cognate with those with /s, ʃ/ or /r, l/ in Altaic languages: the Koguryo nouns may be cognate with those of Turkic languages that end with one of the sibilant sounds. The Paekche and Silla nouns might, however, be cognate with those of Mongolian and Tungus languages which end with one of the two liquid sounds.

略語

Bur : ブリアート語	Mo : モンゴル語	Ork : オロッコ語
Cha : チャガタイ語	MTK : 中期チュルク語	Osm : オスマン・トルコ語
Chuv : チュワシ語	Nan : ナナイ語	PA : アルタイ祖語
EMK : 初期の中期韓国語	Neg : ネギダル語	PTK : チュルク祖語
Evk : エベンキ語	NK : 現代韓国語	Sol : ソロン語
Khk : ハルハ語	Och : オルチャ語	Tat : タタール語
Klm : カルマック語	Oir : オイラート語	TK : チュルク諸語
Lam : ラムート語	OJ : 古代日本語	Uig : ウイグル語
LMK : 後期の中期韓国語	OK : 古代韓国語	Udh : ウデヘ語
Ma-Tg : 満州・ツングース語	ON : 古代北欧語	WMo : 西モンゴル諸語
MK : 中期韓国語		